

呑川の概略

呑川は武蔵野台地の一番南端の多摩川のすぐ北側を、いくつかの谷筋の湧水を集めて山を削り平地を造りながら、世田谷区の旧大山街道「桜新町」を源流として、目黒区の「都立大学」付近で支流の駒沢流れ・柿の木坂流れを、大田区と目黒区の境の「緑が丘」で九品仏



川、「道々橋」で洗足流れを合流して大田区の真ん中を縦断して東京湾に注いでいました。明治後期から東京の人口は増加しだして、特に関東大震災後から鉄道が郊外に向けて造られるのに伴い、丘は削られ樹木が伐採され、そして田圃も埋立てられ、住宅や工場に変わっていきました。そのため川に流れ込む湧水は少なくなり、代わりに家庭や工場の排水が都市河川に流れ込み、どぶ川化して「臭い」「汚い」川になってしまうと共に、保水力のなくなった川は洪水を繰り返すようになりました。東京都は昭和 39 年の東京オリンピック前から、下水道（合流式）の完備をドブ川化した中小河川を利用するなどして急ピッチで進め、呑川も本流は工大橋まで、支流の駒沢流れ、柿の木坂流れ、九品仏川が下水道幹線として埋め立てられました。

その後世田谷区では国道 246 号線以下の呑川本流の上に 1977 年（昭和 53 年）に緑道を完成させました。また呑川緑道の国道 246 号線(厚木街道)の手前から駒沢通りの日本体育大学までの一部に、湧水と雨水を循環させた水路（呑川親水公園）を 1990 年（平成 2 年）に造り、古木のきれいな桜並木が水面を包み、所々に石橋や川面に降りる小さな石段があり、石畳もマッチした区民の憩いの場になっていて、その先は暗渠の蛇行跡の呑川緑道が続いています。

目黒区内で、本流は 1972 年（昭和 47 年）、支流（駒沢流れ、柿の木坂流れ）支流（九品仏川）は 1973 年（昭和 48 年）に緑道化を完成させました。ここにも多くの桜並木があり区民に親しまれ、駅周辺は自転車置き場としても利用されています。

大田区に入ってから池上付近までは、きれいな水が流れています。湧水はごくわずかなので、新宿の落合水再生センターから高度処理された下水処理水が清流復活事業として 1995 年（平成 7 年）から地下パイプで送られてきていて、緑が丘・工大橋の黒いゴムの遮へい板から流れ出てきます。久が原の本村橋で洗足池からの洗足流れが、谷築橋で都営地下鉄（馬込・西馬込駅）の湧水が池上梅園の池を経由して流入しています。



国道 1 号線の池上橋から下流は潮の満ち干によって水量が変わる感潮域になり両側に犬走りがあります。特に西蒲田付近は川が S 字に 90 度屈曲しているところが 2 ヲ所（双流橋・J R 鉄橋）あり、川底の凹凸形状と潮の満ち干の影響などで、水の流れが滞留して汚い臭い川となっています。京浜急行の夫婦橋から下流は海の影響が強くなって川幅も広がり、船も航行できるほどきれいになり海老取川に流れ着きます。右岸の夫婦橋親水公園は大災害時の救援物資の荷揚場と避難経路及び親水広場として利用できるようにしています。呑川新橋の左岸下流にある「大森一丁目公園」も河口付近の海苔栽培が盛んだった頃は共同荷揚場として利用されていましたが、現在は親水公園テラスとなっています。

大雨が降ると呑川には、トイレの排水を含む家庭排水が下水道管で処理しきれなくなって、越流水として入ってきます。油やごみがこびりついた下水道管から剥がれて流入し、白い塊りとなって浮かび（スカムという）、やがてこのスカムは川底に沈み、微生物の働きで分解され、臭いが出る硫化水素ガスが出てきて、川は大変汚くなります。

住宅の建設や道路や駐車場が舗装されて、雨水が土に浸み込む量が減って、大雨の時は一度にたくさんの雨水が川に流れ込むようになり、昭和の初め頃から水害が増えてきました。そこで水害を防ぐために呑川の改修が始まり、川幅を広げ、まっすぐ流れる川にして水の流れを良くしました。昭和 7 年から昭和 10 年まで京急蒲田から下流に「藤兵衛堀」を拡張利用して直線に掘り進み新呑川を造りました。旧呑川は清水橋左岸から分かれ併用されていましたが、川の汚れがどんどん悪化したため、昭和 36 年東蒲中学の敷地として埋め立て始め、昭和 51 年暗渠緑道の旧呑川緑地公園となりました。戦後も水害が無くならないので、より川幅を広く・深くする工事をすると共に、中流の中原街道の下に多摩川まで大雨の時に呑川の水が流れる「中原幹線」を造り、昭和 40 年頃から水害が無くなりました。

以上